
即興物語 戻れ得ない...

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即興物語 戻れ得ない…

【Nコード】

N5069F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

くだらない人生。くだらない現実。くだらない自分自身。それをかえるものは何か。結局くだらない現実の繰り返しだ。そんなものに意味はない。バカバカシイ…。

(前書き)

酒に酔った勢いで書いた物語。はっきり言ってバカバカしい。なにももって人は生きるのが。突如訪れたフェイズシフトの先にあるものも結局は現実の延長にすぎないのではないか。そんなことを思うこのごろ。

「叶わない夢などない。届かない願いなどない」

そんなことを本気で信じていたのいつたいたい頃の頃だったか。あの頃は世界の全てが輝いて見えて、手にするもの目に映るもの全てに新鮮な驚きと喜びがあったはずだった。

それが、何を間違えてこうなってしまったのか。考えることは売り上げを伸ばすこと。同僚といかに衝突せずに日々を過ごすことばかり。何が楽しいのだ、何も楽しいことなどない。だったら何故こんなピエロにも劣る茶番劇をする羽目になったのだ。答えは簡単だ。生きるため、糧を得るためだ！

くだらない、実にくだらない！！

私がしたかったことはこんなことではなかったはずだ。何故こんなことになってしまったのだろうか。所謂就職氷河期と呼ばれた次代をくぐり抜け、私は納得の出来る企業に入社することが出来たはずだ。だったら、何の不足があるのか。何を不満と捉え、私は何がしたいのか。

答えはない。考えることすら億劫だ。いつそのこと、全く異なる世界へ私を誘ってくれるのなら私は喜んでその誘いを受けるだろうに。

現実ではないどこか、ともすれば夢のような楽園の広がる世界へ。私は鏡を見つめるその手を握りしめ幾度となくそれを思い、それが現実とならないことに嫌気がさしたことだろう。今ある私が現実としたら、私は夢へと陥ってしまいたい。そんなことを考える始末だ。手に負えない。私はネクタイを握りしめ深い深いため息をつく。靴を取り上げ部屋を出た。

鏡に映るのは自分の姿だけ、それ以外に映り込むのは私が思い描く幻だけに過ぎないだろう。幻とは現実を外れたもの、即ち私が請いてやまない夢への階となるのか。

私は街を歩く、雑踏に踏みしだかれ日常の阿鼻へと沈み込んでいくこの世界において私は何者であるのか。私はそれを避けるように道を外れる。雑音がない裏の路地へと私は誘われるかのようにそこへと足を踏み入れていった。

『鏡に映る姿は自分の姿だけだと思っていた』

雨が降っていた。それは心身と降り注ぐ細い線として私の身体をゆっくりと侵食していく。私は立ち止まり空を見上げた。

薄い雲が覆い尽くす灰色の空はなにやら私自身がそれと同じ者であるかのような錯覚を与え、私は身震いした。何を私は考えているのだろうか。

私は走り出した。誰もいないその場所へと私は誘われる。

『君は今の自分が本当の自分だっと思ってる？』

その声はどこから聞こえたのだろうか。私の耳を打つものは地面のくぼみにできはじめた細雨の塊が奏でるヒチャヒチャとした音だけのはずだった。

やがて裾が濡れそぼり、せつかく新調したネクタイさえも雨のために色を変じ始める始末だった。

ついていない。まったくついていない。自分の不運を呪うが逸れもまたくだらない戯れ言になってしまう。

『それとも、真実の自分に向き合うのが怖いのかな？』

ナンセンスな話だ。真実など何処にあらう事か。私の周りにあるのは懷疑に満ちあふれたものばかり。何処にも確かなものはなく、自分さえもその中に埋もれていく。

歩調を強もめるもその先にあるものは私が今さっき歩んできた道

が続くばかり。いったこの道は何処まで続くというか。

『見せてあげる。真実の君を。この世界が何で出来ているのかを・
』

どれほど悔やんでも時間を戻すことは出来ない。この時の私はどこか壊れていたのだろう。私の脳裏に響くこの声に私はただうなずくことしかできなかった。

それしか、他に方絵がないものだと思い切っていた。

何のことはない、私がこの時するべき行為はただ今来た道を引き返すことだけだったというのに。

真実の私？この世界の構成要素？

くだらない、そんなものを知らなくても私は生きていける。何故、そんなものを知る必要があるのだ。私は、ただ私が望み納得できる生き方を選びたいだけだというのに。

これでは何も変わらない。

ただ、日常として私を侵食する現実が変わるだけだというのに。

私はうなずいた。私の脳裏に響くその言葉に、私はうなずいてしまったのだ。

私の眼前にそびえる巨大な鏡。それは私を映し出した。そこに映し出された姿は確かに私の姿その者だ。

しかし、ああ・・・・・・なんとということだろうか。私は私という姿を知らなかった。

そこに映し出された姿は、いったい何者だったのだろうか。私は私であり私を構成する私というものその者は私という意識によって成り立つ。ならば、私が私という姿を知らなければ私はいったい何を持って私自身を認識できるというのか。

夢であって欲しいとも思った。

しかし、これは現実なのだ。

私は、ただその運命を享受するしか他がなかったのだ。

戻りたい、あの頃の私に戻りたい。しかし戻れない、なぜなら、
今こうしている私もまた私自身なのだから。

私は生き続ける。今までとは違う私として。

・・・生き続けるしかなかった・・・

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5069f/>

即興物語 戻れ得ない...

2010年12月10日22時52分発行